陶晶孫と精神医学
――「剪春蘿」をめぐって

廖　　莉　平

はじめに

中国近代文学を研究する際に、創造社の存在を無視する事はできまい。周知のように、創造社で大いに活躍した郭沫若・郁達夫・田漢・張資平・成仿吾については、これまで中国近代文学研究上で度々取り上げられてきた。しかし、同時期に参加した陶晶孫についての研究は、中国のみならず日本においても極めて少ない。

通常創造社の活動は三つの時期に分けられている。第一期は郭沫若を中心に『創造季刊』を編集していた時期であり、第二期は周全平を中心に『洪水半月刊』を編集していた時期であり、第三期は成仿吾をはじめ、日本から帰国した新人も加わって編集していた『文化批判』と『創造月刊』の時期である。第一期創造社の活動は、上海・広州等で活動した第二・三期創造社と違って、主に日本で展開され、陶晶孫が積極的に参加したのはこの第一の時期である。精確にいうならば、彼が九州大学在籍中のことである。

創造社の発足した時期である1921年７月は、陶晶孫がちょうど大学２年生[1]の夏休みにあたる。彼がその成立日に立ち合っていない理由を現在の資料では明らかにはできないが、郭沫若が刊行物に『創造』という名前をつける決心を励まし[2]、また、第一巻第二期から雑誌を横組みにするきっかけをもたらしていることから[3]、創造社における彼の功績を看過することはできないだろう。1923年３月に郭沫若と同時に九州大学医学部を卒業してから、彼は日本の東北地方に行き、郭沫若は中国上海に帰った。従って、創造社は活動の拠点を中国へと移した。以後、陶晶孫は直接的には創造社の活動に殆ど参加しなかった[4]。

創造社の特徴を「大正期の日本で青春を過した留学生が作った団体である」[5]と指摘した伊藤虎丸の言葉から、創造社に属するメンバーの一面を窺うことができる。しかし10歳で日本に来た陶晶孫は青春時代のみならず、少年時代の大半も日本で過し、創造社の中で最も長く日本で生活をしてきた作家である。従って、日本が彼に与えた影響も、日本のことを良く理解していた彼が日本に与えた影響も、同人たちより深かったと考えられる。これに関して伊藤はこのように述べている。

> 例えば陶晶孫と同じ留学生仲間である郭沫若や郁達夫などの場合、確かに日本の大正文学から深い影響を受けてはいるが、彼らが「日本人一般」の中に何らかの影響を与えたりしたかと言えば、当然のことながらそれは皆無と言ってよい。例外は魯迅と陶晶孫しかないのではないだろうか（それをいうと、中国の友人たちには怪訝な顔をされてしまうことが多いのであるが）[6]。

伊藤に従えば、日本人の心の共鳴を引き起こしたのは魯迅と陶晶孫しかいないという。陶晶孫と中国近代文壇の巨匠魯迅とを同等の位置に並べて論じることは多少過大評価にも見えるかもしれないが、角度を変えてみれば、これは文壇における陶晶孫の重要性を示している。このことからも、作家である陶晶孫について検討していくことは意義なしとしない。

しかし、上述のように日中における陶晶孫研究は未だに重視されていないのが現状である。中国側では、陶晶孫が日中戦争中に日本政府当局の下で仕事をしたことがあったため漢奸と見なしていた。80年代までは陶晶孫への評価は「創造社の一員」としか記されておらず、陶晶孫の作品の出版さえもできなかった。1995年に人民文学出版社によって『陶晶孫選集』[7]が出版され、これがきっかけで陶晶孫の名前は再び中国文壇に登場し、陶晶孫に対する評価も多少上がってきた。この中で、最も注目を集めたのは1998年12月に上海の百家出版社より刊行された『陶晶孫百歳誕辰記念集』である。これは主に、陶晶孫の名誉回復に重きを置き、日本にも深く親しみつつ母国も愛する陶晶孫の複雑な心情と、作品に表れる「東洋風」(日本的なものを指す——筆者注)の特徴について、日中両国の中国文学研究者が論じたものであり、暫く中国文壇に波紋を投げかけたが、それがきっかけとなって陶晶孫についての研究が活性化するにはいたらなかった。

日本側では、陶晶孫が死去した直後に創元社によって出版された『日本への遺書』[8]が当時の日本の文化界に一時的にセンセーションを巻き起こした。『日本への遺書』を出版した当初は陶晶孫及び作品に関する様々な評論が発表されたが[9]、日本に留学したことがある魯迅、郭沫若などを扱うような研究姿勢はなかなか見当たらない。近年、日本時代における陶晶孫に関する論文はいくつか出されているが、陶晶孫本人及び作品分析における研究が精密かつ詳細に行われたとは言えない。陶晶孫と日本の関係は上で述べたように深く、文学者である陶晶孫を見るには当時の日本文学界の動きとの関係を無視することはできないであろう。これについては小崎太一が陶晶孫の来日した1906年前後の日本文壇の状況を分析した上で、「晶孫は東京の社会を通して世紀末芸術を吸収していった」[10]と指摘している他に、関東大震災の後に生まれた新感覚派とプロレタリア文芸活動が、この後の彼の文学思想に強い影響を与えた[11]と論じている。

さて、陶晶孫には二つの顔がある。一つは医者の顔であり、もう一つは作家の顔である。二つの顔は常に同時に重なっているため、作家としての陶晶孫を論ずる際に医者の顔を全く無視することはできないはずである。しかしこれまでの陶晶孫の研究においてこの二つの顔を統一的に関連付けて論じることは看過されてきた。また、長年にわたって中国語を使わなかった陶晶孫は、自由自在に駆使している日本語に比べ中国語のほうは不得意であり、日本語と中国語を混同している場合もよくある。この欠点は明らかに陶晶孫の作品にも影響を与えている。詳しい分析は次の機会に譲るが、大勢の論者が陶晶孫の文章の分かりにくさに足を引っ張られたために、作品の細部について仔細に検討を加えることを怠ったのではあるまいか。これまでの総ての陶晶孫研究は正しくその間の事情を物語っている。

そこで、本稿は、医学の中でも特に精神医学の影響があるとみられる「剪春蘿」を取り上げ、考察していきたい。「剪春蘿」は1922年11月に創作され、1927年の『音楽会小曲』に収録されている[12]。文壇に現れてから既に80年も経たこの小説は陶晶孫の作品の中で殆ど注目されていない。「剪春蘿」を論じる場合は世紀末思想との関連を強調されることが多い。管見の限りでは、「剪春蘿」を取り上げ論じたのは上掲の小崎の「陶晶孫の福岡時代の文学にみられる世紀末の耽美性について」のほかは

ない[13]。

本稿は、「剪春蘿」を中心に、特に夢に焦点を当てて作家である陶晶孫が医者としての知識を作品の中にいかに活かしていたのかについて、郭沫若の「残春」における夢と比較検討しながら探究する。これらを解明することによって更にこの作品の実質に迫ろうとする試みである。

1．主人公の人格形成について

「剪春蘿」は三人称の小説であり、主人公の一人である“葉”の視点を通して同性の学生同士の悲劇の恋愛物語を描いている。ここでまず、作品の梗概を簡単に述べておく。

年若い“葉”は父に強制的に田舎の学校に入学させられ、寮生活に慣れないせいか、翌日早々眼が覚め窓から寮を飛び出し、彼の後を追ってきた“緑”と知り合った。二人の友情が深まると共に“葉”も学校の生活に慣れてきた。ある日、“緑”が突然いなくなって途方にくれた“葉”は、その翌日に学校に戻ってきた“緑”を見つけ思わず涙を流したが、誤解を解いた二人は今まで以上に愛し合うようになった。何日かが経ったある夜に“葉”は“緑”が河に落ちた夢を見たが、逆に二日後に自分が河で溺死してしまった。

こうしてみると、作品の問題となる骨子は“葉”の夢と彼の突然の死、つまり作品の終盤に当たる部分である。死というテーマは陶晶孫の九州時代における作品に頻繁に取り上げられ、これまでの研究でも注目されてきた部分と言える。しかしながら、詳しく見れば「剪春蘿」における主人公の死と、九州時代に描かれた他の作品の中に現れた主人公の死とは明らかに違うことに気づく。「木犀」のトシコ先生は病気で死に、「黒衣人」の兄は弟を銃撃してから自殺し、「尼庵」の妹は俗界に戻るのを恐れ、湖に身を投げて死んだ。いずれにしてもこれらの死は大人の死か、あるいは大人の手による死であった。しかしながら「剪春蘿」の場合は、主人公である“葉”はまだ子供でありながら自ら死を選んだのである。これは注目に値する。先述した小崎の論考の中でも死の象徴性について語られているが、死に至る経緯、そして死と夢の関連については全く触れられていない。作品の核といっても過言ではないこの部分を無視する事は妥当な判断と言えるだろうか。確かに応錦襄が「剪春蘿」が「事情があやふやで、曖昧に表現されているため、最初から最後までのプロットのコンテクストと究極的な主題を理解する方法がない」[14]と述べているように、物語の特に夢と死に関する描写は不明確で朦朧としたところが多い。しかし、“葉”の夢と死はいかなる理由もなしに現れてきたものではないはずである。

そもそもなぜ“葉”はあのような夢をみたのか。夢というものは国によって様々な解釈があるが、基本的には大差ない。万国において、昔は夢を神秘なもの、あるいは神に授かったものと看做し、現代ではフロイトを始めとして夢解釈が噴出したように世界中のあちこちで議論されるようになってきたが、現代の夢の研究者たちが共有する認識がある。それは夢というものは夢の主体の人格ととても強く結びついており、この夢をみる人間の無意識の世界を窺うための窓であるという考えである[15]。換言すれば現代における夢は総て無意味なものではなく意味があるものと考えられている。従って、“葉”の夢も何らかの意味を示している。この真意を探るためにまず、“葉”と夢の中に出てくる“緑”との関係について考察してみたいと思う。

“葉”はこの田舎の学校に来るまで、つまり“緑”と知り合う前までは、父、母と祖母と一緒に住んでいた。彼を田舎の学校に入学させた父に対して祖母は、

こんな小さい子供を田舎に送るなんて、お父さんはほんとうに無情だね。祖母ちゃんさえも見かねるよ[16]。

と自分の息子に反対の意を示したが、“葉”の父は一向に自分の意志を変えなかった。祖母でさえ自分の息子の意志を変えることができない人間関係の設定を通して、作家陶晶孫はどんなことを読者に言おうとしているのだろう。小崎は、この部分について“葉”の幼さを強調するものとしてのみ注目しているが[17]、むしろ家長である“葉”の父には逆らえない祖母の慨嘆の内実に着目すべきであろう。もし小崎に従うならば祖母の代わりに、なぜ“葉”の母を登場させなかったのかという疑問を抱く。陶晶孫が生きていた時代に限らず、21世紀現在の中国でも父権思想が色濃く浸透しているのは周知のことである。このことから考えると、祖母の愚痴を挿入させたのは他でもなく、“葉”一家の最高主導権が彼の父の手に握られていることを、陶晶孫は読者に仄めかしたかったからである。一方、この作品で母の姿が現れていないのも、このような父権中心社会の中では、母の上に立つ祖母、更にこの上に立つ主人に対して、母の発言の場がないからではなかろうか。

かくして父の高圧的な支配のもとで生活をしてきた“葉”は、常に父に対する一種の脅威と敵意を抱いていた。作品では親子の関係について全く言及されていないが、子が父に抱く感情については二箇所で触れられている。わずかな言葉ではあるが、充分に我々に啓示を与えるに足る。一箇所は作品が始まってからすぐのところである。初日の夜に寮のベッドで反転しながら泣いていた時に思わず父の言葉――「お前は泣くしかできない、能無しだ」を思い出した“葉”が、家から遠く離れているにも拘わらず、潜在意識の中で父の支配から逃れられていないことが読み取れる。もう一箇所は食堂に入った彼が、

――ああ、私をここに来させたのはすべて父親の名誉欲のせいだ。

と父に対する批判の意を表している部分である。しかし、普通であれば、脅威と敵意が父親に対する直接的な反抗や自己主張へと発展しそうなものであるが、“葉”の場合はそうではない。それどころか、“葉”は家族、特に父親からの理解を求めようと一生懸命に行動している。これは次の文章から裏付けられる。

（前略）これは彼が初めて書いた手紙だ。学校はどんなに悪くて、寮の部屋はどんなに不便かを書いた。

共に学校にきていた父が学校のことを総て把握していることを認識している“葉”は、手紙の送り方も知らないにもかかわらず、あえて直ぐに父に手紙を書いたのは父からの理解を求めるためにほかない。このようにして“葉”の人格形成において、この父親に対するコンプレックスの果たした役割を無視することはできない。これこそは“葉”と“緑”との関係を解き明かすために欠かせない重要な鍵である。これを説明する前に次に、“緑”について考えてみたい。

作品の中で“緑”の家族構成や、“緑”と家族の関係などは明確に描かれていない。したがって“緑”の人格形成について分析するのは容易なことではないが、ここでこの二人の主人公の会話の場

面のいくつかに着目して、“緑”の内面の一部について探求してみたいと思う。
まず、初めて二人が名前を交わしてすぐに、“緑”が次の言葉を口にしている。

君いくつ？寂しくないの？お父さんは？君は幸せだね。君にはお母さんがいる。僕はお母さんがいない。僕は今までお母さんと呼んだことがないよ。

“緑”は父子家庭で、父親の手ひとつで育てられてきたことが上の話から分かる。また、この親子の関係が次の文章から簡単に窺えるだろう。

君は心配していたの？昨日父が病気になったから、僕を迎えに来た人がいたんだよ。君に教えるチャンスさえもなかった。今、帰ってきたよ。

一見すれば、これは“緑”がなぜ黙って学校を去っていたかを“葉”に説明している場面であるが、彼の言葉をよく吟味してみれば、“緑”の父に対する一種の深い感情を窺うことができる。我々だけではなく、聞き手である“葉”もそう感じたに違いない。実際のところ、上述した“葉”の夢をもたらした原因はここにあるが、これについては後述したい。
誤解を解き更に自分の愛情の強さを“葉”に伝えるために、“緑”はまた次のように語っている。

“葉”、君は幸せだ。君にはお母さんがいる。僕は今までお母さんと呼んだことがない。でも、僕には君との友情がある。僕はこの友情を頼りにしている。

ここで“緑”がまた自分に母がいないことを重ねて語ったのにはいかなる真意があるのだろうか。少なくとも我々が断言できる事は、“緑”は常に母親の愛を求めてきたが、今はこの愛を“葉”に寄せるようになったということである。
これまで二人の少年の育ってきた環境、特に家庭関係についてできる限り作品に沿って分析をしてきた。実際のところ、学校に入ってから“葉”と“緑”が直ちに親友になれたのはこの二人が育てられた家庭環境に秘密がある。
前述したように、“葉”は自分の父に対するコンプレックスの影響で、無意識のうちに生活の中で女性的な行動をとっている。例を挙げてみれば以下のようになる。まずは彼の涙もろさ。学校に入学させられた初日の夜にベッドで泣いたり、窓から寮を抜け出した時に擦った背中の痛みに耐えられずに泣きそうになったり、黙って帰ってきた“緑”の釈明を聞いてから体を震わせ涙を流したりしている。二つ目は、教えや助けを必要とする点である。この点は二つの方面から窺える。具体的な行動からみれば、“緑”と付き合ってから「“緑”は“葉”××の保護者になった。寝室のベッドのシーツを敷き、また彼の小さなカバンの中の服の整理・少しの小遣・勉強の準備を“緑”は総て手伝ってくれるようになった」。もう一つは“葉”における無意識の渇望からわかる。初めて会った時に“葉”は“緑”の名前を尋ねた。“緑”に「何でも好きなように呼んでいいよ」といわれた“葉”は自分の意向で「“緑”兄」と呼ぶことにした。しかしなぜ“葉”は「緑」の名前をつけたのだろう。ここで論者は二人の名前に注目したい。「葉」と「緑」をつけると「緑葉」になる。これはどんな意味を表して

いるのだろうか。ただ文字の表面の意味だけを読み取れば、これは緑色の葉の意味にとどまる。この言葉を通して“葉”は何を言い表したかったのだろうか。春になれば葉は緑色になり、自分の生命力と表現力を自然界の舞台に登場させる。秋になれば葉は黄色になり、自分の生涯に終止符を打ち、自然界の舞台から姿を消す。葉にとって緑色は自分の伴侶であり、自分の生命力の象徴でもある。かくして“葉”が「緑兄」の名前をつけたのは“緑”の助けを求めたかったからにほかならない。三つ目は、はにかみ。初めて家族に手紙を書いたが、出す方法を知らなかった“葉”は、出してやるといってくれた“緑”に「中に書かれている字が汚くて非常に恥ずかしい」と思いながら、彼にしぶしぶ手渡している。

“葉”に対して“緑”はいつも男らしい姿で現れている。初対面の時に、自分よりかなり身長の高い“緑”をみると、たちどころに“葉”は「恐れは完全に消えてしまった」。これは体つきにおいても“葉”の女性的なイメージとは反対に、“緑”は男性的に描かれている。また、二人一緒にいる時に、“緑”はいつも“葉”を自分の懐に抱く。

一見すれば、これらの一連の描写は何気なく描かれているように見えるが、もし医学上から二人の心理を分析するならば、より細かく見なければならないはずである。当時精神病学臨床講義を受けたことがある陶晶孫は多かれ少なかれ精神分析の基礎知識が身に付いている[18]。上述した“葉”における人格形成は、精神学研究者ならフロイトが分析したシュレーバー[19]のことを容易に思い浮かべるだろう。また、“緑”の人格形成が、フロイト精神分析論における三大支柱の一つといわれている『性欲論三篇』の中に性対象倒錯を起こしやすい人々の特徴[20]と一致することに驚くだろう。「剪春蘿」はあたかもフロイトの理論を裏付ける実例の存在のようなものである。ここで論者は陶晶孫とフロイトとを直接結び付けて論じる気は毛頭無い。また「剪春蘿」を精神分析と結び付けて分析することは、医学知識を全く持っていない論者の手に余ることも承知の上である。ここで敢えて「剪春蘿」に描かれている二人の少年の心理的変化と、フロイトが主張している観点との類似点を指摘したのは、当時精神病学を学んだ、あるいは学んでいた陶晶孫がフロイトの精神分析から何かインスピレーションを受けた可能性があると考えているからである。大正時代における日本ではフロイトの思想が偏った受容のされ方をしたのは事実であるが[21]、大学でフロイト思想の概容が全く論じられなかったとは言い切れない。1923年3月に、郭沫若は精神分析と夢との関係について以下のように語っている。

> 私は精神分析学についてもとよりそれほど深く研究したわけではないが、精神分析研究は夢の分析から着手するのが最もよいと精神分析学者から聞いたことがある。精神分析学の夢についての解釈には様々な学派がある。例えば、フロイトは夢が幼時に意識下での抑制された願望の充足であると主張する[22]。

このように、1923年3月に郭沫若と同じ九州大学の医学部を卒業した陶晶孫は、無論精神学を学んだ際に郭沫若と同様に、フロイトの理論に触れていたことがあったことが裏付けられる。

2．夢と死について

以上、“葉”と“緑”の関係についてみてきたが、本節では作品の終盤に当たる夢と“葉”の死について分析していきたい。前述したように夢と死はこの作品における最も難解な部分でもあり、この

作品を解明する鍵でもある。従って夢と死について更に吟味することが必要である。

まず夢に関する叙述を簡単にまとめておきたい。理由も分からないままに突然去り、そして帰ってきた“緑”の釈明を聞いた“葉”は、それから何日か経ったある夜に突然飛び上がって「“緑”、河に落ちないで」と叫んだ。慌てて身を起こした“緑”は「僕はここにいるよ、河なんかに落ちないよ」と答えると、“葉”はまた眠りに付いた。しかし翌日に詳しい夢の内容を“緑”に求められた“葉”は、“緑”が河に落ちたことしか覚えていないと答えた。

夢に関する叙述は極めて簡潔にしか描かれていない。夢の中で河に落ちたということは一体何を示しているだろうか。近代に至るまでの夢解きを見てみると、河に落ちる夢はいずれも不吉の兆といわれている[23]。ダニエルによれば河に落ちることは損傷を蒙る兆といい、近代の夢占いの書によれば不運か、あるいは喪失という。これらの解釈は夢の主体と分離して解釈されているが、現代、特に1920年代における夢解釈はどんな解釈を示しているのだろう。

郭沫若の言葉をここで再び借りてみよう。彼は精神分析学における夢の解釈には様々な学派があると説明してから、これらの学派の夢解釈を次のようにまとめている。

> 夢は昼間に潜在意識下に抑制された欲望あるいは感情や、強烈な観念などの複合体であり、睡眠中に監視が弛んだ意識に現れる架空の映像である[24]。

こうしてみれば、郭沫若がまとめている当時の夢解釈は主にフロイトらの夢解釈理論に基づくものである。ところで、落下の夢についてフロイトはどのように述べているのだろうか。ここでまず、現代夢解釈は近代までの夢解釈とはっきり違う点を頭に置かなければならない。それは、夢主体における個人の人格と関連付けて分析していることである。無論、フロイトの夢解釈もこの埒外に出ていない。フロイトの落下の夢は主に不安を意味し、多くの場合夢を見た主体は恐怖・不安の感情を持って覚醒するのが常であると解釈されている[25]。

さて、「剪春羅」における“葉”の夢は一体彼の中でいかなる心的現象を表しているのだろうか。もし落下の夢に夢の主体の不安が現れているとするならば、“葉”の不安はどこに存在するのだろうか。

夢の源泉を探索するならばまず、この前の部分をここで再び振り返ってみなければならない。“葉”は“緑”と出会ってから直ぐにあたかも影と形のような友達となり、やっと親離れできるようになった。「“緑”のためなら何でもする」と決心した“葉”は二人の友情に夢中であった。ところが、自分の父が病気であると聞くやいなや、親友である自分にも告げる時間も待てずに慌てて帰った“緑”の行動から、“葉”はある危機感を感じざるを得なかった。つまり、自分以外に“緑”が大事にしている人はいる。それは他でもない互いに頼り合って生活してきた彼の父である。自分の「唯一の愛」はいつか奪われる可能性があると、“葉”に容易に感じさせたのである。

仮に、“緑”の父の存在に威嚇を感じたとしても、そうした不安は“葉”にとって副次的なものにすぎない。女性的な感覚を持つ“葉”が最も敏感なのは何にもまして自分と“緑”を取り巻く周りの変化だからである。ここで表題である「剪春羅」に着目したい。

剪春羅は二人が知り合ってから最後まで取り上げられている。これは季節の変わりに剪春羅が変化するように、二人の友情の進展も変化していくと読める。ウェットな性格を持つ“葉”は最初から剪

春蘿に特別な感情を心に抱いていた。この点を明晰に読み取るために、剪春蘿に関する部分を引用しておこう（なお、引用はできるかぎり、原文に則して日本語訳している。）

①、その時、たくさんの剪春蘿が咲いているところだった。“葉”の思うに、“緑”の亡くなったお母さんもこのように高音だったのでしょう。

②、花園にすこし慎ましやかで可憐な剪春蘿がある。孤高な“緑”――“葉”も家から離れることを悲しまなくなった。

③、ある日、彼はいつもの通りに枯れかけている剪春蘿の横の石段まで走ってきた。その日、薄暮になっても“緑”は来ていなかった。

④、この花は私達のために咲いた花だ、私達の友情の花だ。

⑤、その日の午後、まだたくさんの剪春蘿の花が咲き残っていた。花の間に二人は微笑んで散歩していた。いましも出てこようとしている月はもう半分顔を覗かせていた。それぞれ一握りの剪春蘿を取って一緒に寮に戻った。

⑥、学校の前の川辺に一握りの剪春蘿が散らばっている――二人の若い村人は青白い顔で黒髪の“葉”を水の中から掬い上げた。彼の片方の手には一本の剪春蘿がしっかりと握られていた。

①は二人が付き合い始めたころに“緑”の案内で初めて花園にきた“葉”の眼に映った風景である。咲き誇る剪春蘿は二人の友情の証人をしてくれた。初めて剪春蘿を見かけた時に“葉”は既に剪春蘿と“緑”と関連付けて様々なことを発想するようになった。彼にとって剪春蘿は“緑”の化身である。②は二人の友情が次第に深まっていくうちに、“葉”にとって剪春蘿が花園の美しさを引き立たせるように、自分は“緑”がいてくれるだけで、寂しさが全くどこかに消えてしまったように感じ取っている。③は美しく咲いた剪春蘿が枯れかけていると描くことで、これまで楽しく付き合ってきた二人の間に何か問題が起こる兆しを示している。結局この日“緑”は帰ってこなかった。これは二人にとって唯一の不和の事件でもあり、二人の友情を頂点まで運ぶ触媒作用も発揮している。④は誤解を解いた後、すぐに“緑”が発した言葉である。ドライな性格を持つ“緑”が美しい花を見て思わず口にしたこの言葉は、二人の愛情の運命を暗示している。無論、話した張本人は表面的な現象しか感じずに二人の愛情を末永く祈ったつもりであるが、感傷的な“葉”からみれば、初夏の時期しか咲かないこの剪春蘿のように、二人の間の恋の花も猛暑の到来――二人にとって大人の介入や、人為によっては反抗できない成長などによって散ってしまうだろうと、いささかなりとも心が動かないはずがないだろう。

このように剪春蘿の変化から感受させられた不安と、いつか“緑”の父に自分の唯一の愛を奪われるのではないかという不安は彼を追い詰め、何日か後の夜に例の怪しげな夢を招いたと推定することができる。

⑤にあたる部分はこの夢を見た翌日の出来事である。まだたくさん咲き残っている剪春蘿は、あたかも二人の恋の花は間もなく幕を閉じるであろうことを表す一方、心から愛情を感じあう二人の象徴のようなものである。満開の時期があれば必ず散る運命もやってくる。美しい剪春蘿も自然界のルールから逃れることはできないように、子供たちも自分の成長をとめることはできない。美しい剪春蘿も所詮散ってしまうならば、一生懸命に咲いているうちに摘み取っておいたほうが花の最期を見届けることができる。二人がそれぞれ剪春蘿を手にして寮に帰ったと描写しているところに、陶晶孫の状

況設定意図が見える。

⑥に当たる部分は作品の結末に現れている。摘み取られた一本の剪春蘿が“葉”の手元にしっかり握られていたことは何を示しているのだろうか。これまで述べてきたように、剪春蘿は二人にとって、特に“葉”にとって、ただの花ではなく二人の愛情の象徴と看做されてきた。二人の間に育んできた恋の花がもし剪春蘿のように散っていってしまうならば、恋を最後まで見届けたいと考えていた“葉”は剪春蘿と共に死に歩んでいくことを選択した。最後に、剪春蘿が一本だけ手元に残り、他は総て川辺に散らばっていた。この一本の剪春蘿は他でもなく、“緑”を示している。それは、死によって二人の愛が全うされたことを表現しているのである。

3．郭沫若の「残春」における夢との接点

陶晶孫と同じく、夢を作品に挿入する手法を使った創造社の同人がいる。それは他でもなく彼の親友且つ義兄の郭沫若である。夢は郭沫若の初期の一連の作品によく現れる一つのテーマである。これについては、武継平が『異文化のなかの郭沫若――日本留学の時代』（九州大学出版会 2002. 12. 10）の中で詳細に論じている。彼の記すところによれば、処女作「髑髏」をはじめ、初期に創作した「羊飼いの哀話」、「残春」、「カルメラ売り娘」、「月蝕」などの小説が何れも夢を描いており、また、これらを早期の夢と後期の夢に分け、早期の「グロテスクな、エキゾチックな伝奇物語のもつ極彩色に合わせた」[26] 夢とは異なり、後期の夢は「象徴的な意味を持つ観念的なもの」[27] であると指摘している。ここで、筆者はこの後期の夢を代表する「残春」を取上げ、この小説の中での夢がどのように位置づけられているのか、そして「剪春蘿」とどのような接点を有しているのかについて簡単に分析してみたい。

「残春」は『創造季刊』の第一巻第二期（1922年８月25日）に掲載された。作品は一人称の短編小説で、粗筋は以下のとおりである。主人公の私は福岡にある海辺の家に妻と二人の息子と共に住んでいた。ある日、中国人白羊君から自殺未遂で入院している旧友賀君が私に会いたがっているという知らせがあった。私は白羊君に連れられて病院に駆けつけた。そこで白羊君が好意を寄せる看護婦Ｓと出会った。常々自分が肺病にかかっているのではないかと心配していたＳは私が医学部の学生であることを聞くが早いか、直ちに私に尊敬の意を示してくれた。その夜、私は夢をみた。彼女と一緒に山に登った後に、彼女から求められて診察をしようとした時、私はまた、白羊君から妻が二人の息子を殺したという知らせを受け慌てて福岡に帰ってみたら、自分も妻に殺されたという夢だった。目が覚めた私はＳに恋心を持っていることを認識しつつも、やはり夢を気にせずにいられなかった。そこで直ぐに福岡に戻った。

この小説は発表後直ぐに中国文壇から手厳しい批判を受けた。同年10月12日の『学燈』において、攝生は以下のように語っている。

> 郭沫若のこの「残春」は文章の構造における芸術的な手法がまずまずである点を除いて、私自身はこの小説に賛成しない。第一章、第二章と読み続けても、全篇のクライマックスがどこにあるか全く分からない。総て無味乾燥なものである。章毎に、節毎に彼の現実の生活と感想を描いているに過ぎない。しかも、結末にも深い含意も脈絡もない[28]。

この批判に対して、まず、反応したのは郭沫若本人ではなく、当時既に帰国していた創造社の同人成仿吾である。彼は『創造季刊』の第一巻第四期（1923年３月初旬）で「『残春』の批判」を発表した。この中で、彼は主に理論上で作品においてクライマックスがあったほうがいいか、それともないほうがいいのかについて論じたが、「残春」そのものについての分析はいずれにせよあまりしていない。一方、1923年３月に郭沫若本人は「批判と夢」という一篇の評論を発表し、「残春」におけるクライマックスについて、次のように説明している。

私のこの「残春」の主眼は、事実の進行に注目したものではなく、心理描写に重きを置いている。その上、私の描いた心理はまだ潜在意識にあるある種の流動であり――それが私がこの小説を創る時の一つの願いであった。もし事実の描写という尺度からこの作品をみれば、確かにクライマックスが全くない。しかし、もし精神分析学、あるいは夢の心理についていささかでも研究したことがある人からみれば、必ずや別の作意を読み取ることができるであろうし、別の意見を述べることができるだろう[29]。

言い換えれば、「残春」に現れる夢こそ“「残春」のクライマックスであり、物語の中心であり、文章の結びである[30]”と郭沫若は主張している。彼にとって、作品の中に現れる夢は二つの類型しかない。一つは、ノンフィクションの夢であり、もう一つは、フィクションの夢である。前者は記実文を記すようにしておけば、厳しい読者であっても文句をつけかねる。後者を創るために、小説家は精密な手順を踏まなければならない。つまり、夢は突然現れるわけではなく、夢をみる前に現実の社会で経験した現象によって潜在意識が作られる。そして、それが夢に繋がるということ――心理的、あるいは生理的な材料を通して読者に説明しておかなければならない。そうでなければ単なる駄作になってしまうと語っている。これは、当時の夢解釈についての知識を自らの創作に活用しようとしたことの表れである。

郭沫若と同時に九州大学の医学部を卒業した陶晶孫は、夢解釈についてどのように受け止めていたのか。個人差によって理解も異なってくるが、これまでの「剪春蘿」の分析から分かるとおり、「剪春蘿」における夢は突然出てきたものではなく、ある意味を象徴している点においては、「残春」の夢解釈と全く一致している。そうしてみれば両作品におけるモチーフが同様であったといえる。しかしながら、現実と夢が極端に対立する「残春」と、現実と夢が一致する「剪春蘿」は、細部にわたってみれば様々な相違もみられる。

まず、「残春」においては、現実と夢の繋がりを明白に読み取ることができる。主人公である“私”は密かに看護婦Ｓに一種の恋心を持ったが、既婚者の自分はこの恋を成就させることができないことも自覚していた。そのため、このような感情の動きを表面に出さないために、一生懸命に抑えていた。しかし、夜になって抑えていた感情が弛み、潜在意識がありのままに表出し、看護婦Ｓと関係を持ちそうになり、家の破壊までもたらしてしまった夢をみたのである。作品における現実と夢との繋がりはありきたりの現象といえる。しかし、「剪春蘿」においては、一見すれば現実と夢は全く繋がりを持っていないようにみえる。現実の中で“葉”と“緑”の間の愛情がますます深まっていく一方、“葉”の夢の中で“緑”が河に落ちた。現実と夢の間に全く見通しが見えないと言ってもいいほどである。「残春」においては、現実と夢という二つの対立の舞台を借りて、不倫の恋に走ろうとする

“私”の外面と内面の心理的な動きを描いている。それに対して、「剪春蘿」では、“葉”と“緑”の心理的変化が、現実と夢にそのまま対応をして表れるのではなく、二人が置かれた家庭環境・社会環境の違い、そして二人の愛する植物の変化との関係の中に仄めかされているにすぎない。前述したように、それらの関係と変化を理解し、はじめて「剪春蘿」の夢の意味が分かってくる。“天才的な作者であれば、もともと非凡な才能を持っているのであるから、たとえ意識的な心積もりがなくとも、無意識のうちに自身の作品を理にかなったものにすることができる[31]”という郭沫若の言葉に、あたかも陶晶孫が応じて創作したかのように思われる。

次は、夢を描写する分量も甚だ違う。「残春」においては、夢を一章に独立させこまごまと描写している。物語の中にもう一つの物語が含まれているように読み取れる。一方、「剪春蘿」においての夢は、物語どころか、二言三言のうわ言で終わってしまった。一見すれば「剪春蘿」の夢はあってもなくてもよいと看做されるが、本稿の第二節で分析してきたように、“葉”の死を解明するための欠かせない重要な鍵でもあり、夢を見た前後の“葉”の心理的な変化も暗示されている。夢に関する描写は「残春」より遥かに少ないが、“クライマックスであり、物語の中心であり、文章の結びである”という「残春」の夢の働きに少しも劣らない。

また、小説中の虚構の世界と、実際に小説家が生活している現実の世界との接点に関しても違う。「残春」はある意味から言えば、郭沫若の実際の私生活の心境を反映しているものである。前掲した武継平は、“実生活の中でできないことを夢の中で実現させようとした[32]”と、後期の夢を意味づけている。換言すれば、郭沫若は夢という虚構のものを描くと同時に、自分の私生活をも巧妙に織り込み、作品の中で再現させたのである。一方、陶晶孫の「剪春蘿」はどうであろう。人物設定からみればモデルが存在しないことが直ぐ分かる。つまり、陶晶孫の筆先に現れる虚構の世界は実際には彼の私生活の中にも存在していない。これも陶晶孫にとっていわば一つの夢でもあり、“一種の幻想的な嘘”でもある[33]。従って、陶晶孫と郭沫若の創作と現実のかかわりの深さが一様でないことがわかる。

最後に、結末に注目したい。「残春」では“私”は看護婦Sにまだ未練があるが、結局、社会的道徳観念と家庭に対する責任感に背をむけることができなかった。二人の恋は棚上げにされうやむやになってしまった。「剪春蘿」では、上述したように周囲からの干渉や自身の成長を防ぎ止めることはできなかったが、“葉”は“緑”の化身と看做す一本の“剪春蘿”を手に握り、愛を全うするために死んでいく。このように、恋に執着し最後まで追求する“葉”と、中途半端に恋を中断する“私”という二人の主人公の設定は大きく異なっている。

「剪春蘿」と「残春」の発表時期の前後からみれば、陶晶孫は「剪春蘿」を書き始める前に既に郭沫若の「残春」を視野に収めていたことは確かである。それに、1923年3月の時点で、「残春」の創作意図について郭沫若は郁達夫に話したことがあると語っていることから、この小説を発表した1922年の夏に一時一緒に生活していた陶晶孫にも語った可能性が極めて高い。従って、陶晶孫が「剪春蘿」を創作する際に、何らかの形で「残春」から暗示を得ていたと考えられる。しかし、暗示を得たからといってそのまま模倣したのではない。以上見てきたように、陶晶孫は郭沫若より遥かに巧妙な形で夢を作品の中に活かしているといえる。

おわりに

本稿では、作家である陶晶孫が医学生としての知識をどのように創作中に活かしていたのか、具体

的に「剪春蘿」を取上げて試論したものである。作品の終盤に現れる夢についてフロイト夢解釈との関連と、夢をみた主体である“葉”の心理描写を分析した結果、「剪春蘿」を創作した当時医学生であった陶晶孫が、いかに巧妙に夢を描き、自然科学者としての思考力を最大限活用していたかを解き明かすことができた。

また、同じ夢というテーマを用いた「残春」と比較することで、モチーフは同じでありながら、現実と夢との関係や、現実と作者自身の私生活との関係などの違いから、両作品の相違をも明らかにすることができた。

創造社設立直前の1921年１月に、同人の一人成仿吾は“我々とほかの人々とちがう点は、科学上の基礎知識を持っていることである[34]”と語ったこの言葉から、創造社に属する同人たちの創作の出発点がわかる。後に文学者としての道を選ばず、専ら自然科学研究に没頭した陶晶孫は、既に九州にいた時から他の同人以上に科学的知識を作品に取り入れようとしたといえるだろう。1927年に、初めて出版した短編集『音楽会小曲』の「後書き」からも、陶晶孫のこのような創作の姿勢を窺い知ることができる。少し長くなるが、陶晶孫の言葉を引いてみよう。

> 私は思う。小説や戯曲などは一種の幻想的な嘘にほかならないと。（中略）もともと、私は病気に苦しんでいる人々に同情する一人の医学生であった。また、基礎医学から生物学まで、さらに生物物理学まで勉強し、純粋科学に対して燃えんがごとく熱心な一人の学生でもあった。しかし、人はみんな夢を見る。時折、それらの夢はいささかの味わいを含み、それをペンと紙で描き出してみれば、時として、それらの夢幻は一つの創造に変りうる。換言すれば、人は自分の夢を制限できないし、無理に夢をみることもできない。しかし、この極めて不自由な夢幻の中から、我々は人間味を湛えた人生の味わい深い独創をいささかなりとも選び出すことができる[35]。

すなわち、陶晶孫は様々な“夢”を描くことによって、一つひとつ物語を紡ぎ出そうとしたのである。その上、いわゆる純粋な文学者と異なって、“純粋科学に対して燃えんがごとく熱心な一人”の医学生の立場に視座を定めて、創作に取り込んでいる。これまで考察してきた「剪春蘿」は、言うまでもなくこうした創作姿勢の結晶と言えよう。

（※本稿の中国語の引用文は拙訳に拠る。）

注

1）、1998年12月に百家出版社に出版された『陶晶孫百歳誕辰記念集』に掲載されている「陶晶孫年譜」の記すところによれば、陶晶孫が九州大学に入ったのは1919年４月になっているが、武継平が九州大学医学部における資料調査で見つけた陶晶孫の自筆で書かれた履歴書によれば、1919年の７月以後であり、また、伊藤虎丸『創造社研究――創造社資料別巻』（アジア出版　1979年10月　p104）の記すところによれば、陶晶孫が九州帝国大学医学部に入学したのは1919年10月になっている。この中で最も信憑性が高いものは武継平の所説と判断し、本稿はこれに基づく。これによれば1921年７月は陶晶孫の２年生の夏休み時期に当たることが分かる。（武継平のものは『異文化のなかの郭沫若――日本留学の時代』による）

2)、はじめ「創造」という名前が多少肩に力が入り過ぎの印象があるため、若干それより柔らかい名前をつけたほうがいいという意見があると郭沫若から聞いた陶晶孫は、直ぐに、「“創造”、この二文字以上に相応しい名前はないでしょう。遠慮しなくていい。ただいい文章を作ることに留意すれば」と答えた。陶晶孫「記創造社」『陶晶孫選集』人民文学出版社　1995. 5　p239。

3)、注2）に同じ。p241。郭沫若の夫人佐藤富に贈る楽譜「湘纍的歌六曲」（陶晶孫著）を載せるため、『創造季刊』第一巻第二期から総て横組みになり、第一期の横組みの再版本も1923年に出版された。この再版本の最後の「編輯余談」の記すところによれば、最初ページの図と各欄のデザインが全て陶晶孫の考えだったことが分かる。これも中国文芸雑誌横組みの先駆けとなった。

4)、何篇かの作品を創造社に投稿したが、この以後の創造社の活動に陶晶孫の姿は全く現れていない。伊藤虎丸の記すところによれば、元来、『創造日』を創刊することに対して、賛成する成仿吾、郁達夫に反して、郭沫若は反対の意見を出した。夏休みで帰国してきて同席していた陶晶孫、何畏が概ね郁達夫たちに同調し、刊行が決定されたという。こうしてみれば、少なくとも『創造日』創刊には陶晶孫の意見も反映している。(「創造社小史」;『創造社研究――創造社資料別巻』; アジア出版1979年10月；pp. 9～10)

5)、注4）に同じ。「問題としての創造社――日本文学との関係から――」；p45。

6)、伊藤虎丸「戦後五十年と『日本への遺書』」;『日本への遺書』；東方書店1995年；p218。

7)、注2）に同じ。「序言」に記すところによれば、戦時中上海に残った陶晶孫が共産党から秘密の仕事を背負ったためである。この本が出版された当時、陶晶孫は既に名誉回復されていた。本稿に触れる作品は総て同書に拠る。

8)、注6）に同じ。p224。これによれば、『日本への遺書』という書名は、陶晶孫自身が命名したのではなく、彼の死を惜しむ日本人の友人たちによって名づけられたものである。

9)、例えば1952年11月15日『朝日新聞』竹内好「明治日本へのノスタルジア」や、同年同月『サンデー毎日』須田禎一「インテリの善意」、同年12月8日『読売新聞』手塚富雄「ひびいてくる自由な声――胸にしむ“文弱の徒”の文明批評」等など。

10)、小崎太一「陶晶孫の福岡時代の文学にみられる世紀末の耽美性について」;『比較社会文化研究』第六号（1999）；九州大学大学院比較社会文化研究科；p27。

11)、小崎太一「陶晶孫と関東大震災」;『比較社会文化研究』第五号（1999）；九州大学大学院比較社会文化研究科。

12)、初版は1927年に創造社叢書第十六種として上海創造出版社から出版されたが、本稿では1989年6月に上海書店によって出版された初版の影印版を参考する。

13)、小崎は、福岡時代の陶晶孫の作品が世紀末の耽美性を帯び、特に「剪春蘿」がミレイの「オフィーリア」の象徴性と類似している点から、主人公の溺死が「清らかな子どもの幼さを保ったまま死んだことを表している」と指摘している。小崎の見解が正しいかどうかはここで触れないことにするが、「剪春蘿」とミレイの「オフィーリア」とを結びつけて論じることはどうも牽強付会の憾みなしとしない。陶晶孫研究においては、日本にせよ、中国にせよ、世紀末思想の影響の大きかった20世紀初期の日本と当時日本にいた陶晶孫との関連性を強調しがちである。「剪春蘿」を論じた小崎もこの枠を超えてはいない。

14)、応錦襄「一位不応被文壇忘却的人」;『陶晶孫百歳誕辰記念集』；百家出版社1998. 12；p91。

15)、M・ポングラチュ　I・ザントナー『夢の王国――夢解釈の四千年』；河出書房新社

16)、本稿の引用文はすべて『陶晶孫選集』（人民文学出版社　1995年）に基づく。

17)、注12）に同じ。p31。

18)、九州大学で陶晶孫の受けた授業に関して、本稿は武継平の『異文化のなかの郭沫―
―日本留学の時代』（九州大学出版会　2002. 12. 10）に基づく。大正11年、『医学部規程』第九条によれば、決められた期間で以下の講義と実習を修了したものだけ試験を申請することができるという。従って1923年３月に卒業した陶晶孫は「剪春蘿」を創作した1922年の11月の時点で既にこれらの講義を受講したか、あるいは受講中ということが分かる。

なお、履修した講義と実習の科目は以下の通りである。解剖学講義・生理学講義・病理学講義・医化学講義・薬物学講義・診断及治療法・内科学臨床講義・小児科学臨床講義・整形外科学臨床講義・眼科臨床講義・耳鼻咽喉科学臨床講義・衛生学講義・黴菌学講義・法医学講義・外科総論・精神病学臨床講義・外科学臨床講義・産科婦人科学臨床講義・皮膚病黴菌学臨床講義・解剖学実習・生理学実習・病理学実習・医化学実習・薬物学実習・衛生学実習・黴菌学実習・法医学実習。

19)、「自伝的に記述されたパラノイア（妄想性痴呆）の一症例に関する精神分析的考察」;『フロイト著作集　９』; 人文書院1996. 1. 20。

20)、「性欲論三篇」;『フロイト著作集　５』; 人文書院　1996. 1. 20。

フロイトは「性対象倒錯の防止」を論じて以下のように語っている。

男児を（古代においては奴隷のような）男性に養育させることは同性愛を助長するようにみえる。（中略）多くのヒステリー症のものの場合に明らかなことは、両親の片方が（死んだり、離婚したり、別居したりしたために）早くいなくなってしまい、それからはあとに残されたものが子供の愛をすっかり自分のほうにひきつけてしまったために、のちに性対象として選ばれる人物の性に対する条件が確定してしまったり、同時にまた永続的なインヴァージオンが起こることにもなった、ということである。

21)、小此木啓吾「日本へのフロイト思想の導入（１）」;『フロイト精神分析物語――フロイト思想の実像を描く――』（浜川祥枝・生松敬三・馬場謙一・飯田真編）; 有斐閣ブックス出版社; 1986. 6. 10。

22)、郭沫若「批評与夢」;『創造季刊』第二巻第一期; 1923. 5。

23)、注15）に同じ。以下の夢解釈についての記述も同書に拠る。

24)、注22）に同じ。

25)、相田信男「夢（２）」;『フロイト精神分析物語――フロイト思想の実像を描く――』（浜川祥枝・生松敬三・馬場謙一・飯田真編）; 有斐閣ブックス出版社; 1986. 6. 10。

26)、武継平「小説創作の試み」;『異文化のなかの郭沫若――日本留学の時代』; 九州大学出版会; 2002. 12; p267。

27)、同上。

28)、攝生「讀了『創造』第二期後的感想」;『学燈』; 時事新報館編輯; 1922. 10. 12。

29)、注22）に同じ。

30)、同上。

31)、同上。

32)、注26）に同じ。

33)、注12）に同じ。p197。

34)、郭沫若作　松枝茂夫訳『創造十年　続創造十年』; 岩波書店; 1960. 8. 25; p69。

35)、注12）に同じ。p197。

JINGSUN TAO AND PSYCHIATRY

― A PERSPECTIVE OVER "GANNPI" ―

Liping Liao

In the present article, it was originally discussed how JingsunTao as a writer took a good advantage of his medical knowledge in his literary creation, with a concrete analysis based on his novel of "GANNPI". Tao finished this novel while he was a student of medical school. The leading character named "Ye" had a dream at the end of the novel. Both the connection of this dream with Freud's dream interpretation and the psychological description of "Ye" was analyzed. The result gave us an opportunity to infer how Tao made the most use of the thinking faculty of a natural scientist by describing the dream elaborately.

In addition, Tao also wrote another novel, "THE LINGERING SPRING" in which the same theme of the dream as "GANNPI" was described. Although the motif of both literary works was same, we are able to clarify the differences of them from the relationship of reality and dream as well as the literary creation and the private life of the author own.